

一般口演

(1) パーキンソン病に対する鍼灸治療の臨床的効果の検討

○福田 晋平¹⁾, 江川 雅人²⁾, 矢野 忠³⁾, 山村 義治⁴⁾, 苗村 健治⁴⁾

明治国際医療大学大学院鍼灸臨床医学¹⁾, 明治国際医療大学加齢鍼灸学教室²⁾,

明治国際医療大学健康・予防鍼灸学教室³⁾, 明治国際医療大学内科学教室⁴⁾

要 旨

【目的】

鍼灸治療がパーキンソン病患者の臨床症状に与える効果について検討した。

【対象】

パーキンソン病患者 13 例（男性 5 例，女性 8 例，平均年齢 66 ± 11 歳）で H-Y 重症度は I : 4 例，II : 5 例，III : 4 例であった。

【方法】

鍼灸治療の方法は弁証論治に従い，痛みや便秘等には対症的な施術を追加した。治療頻度は週 1 回，計 10 回の鍼灸治療を行った。治療効果の判定は鍼灸治療期間の前後で行った。治療効果は，パーキンソン症候を UPDRS（Part I : 精神症状，Part II : 日常生活活動，Part III : 運動症状，および Part I ~ Part III の合計点），QOL の評価を PDQ-39，抑うつ状態を GDS，及び演者らの作成した健康調査表によりパーキンソン症状と全身状態を評価した。

【結果・考察】

UPDRS 合計点では 13 例中 10 例で改善し，パーキンソン症候の改善傾向が認められた ($p < 0.1$)。Part II では有意な改善 ($p < 0.05$) を認め，振戦，歩行の項目で改善傾向 ($p < 0.1$) が示された。GDS，PDQ-39，健康調査表では有意な差は認めなかった。各評価項目間の相関性を検討（ピアソンの積率相関係数）すると，UPDRS の合計点は UPDRS の Part II ($r = 0.69$)，Part III ($r = 0.96$) と関連性を認め，GDS は健康調査表の便秘 ($r = 0.56$)，全身倦怠感 ($r = 0.79$)，不眠 ($r = 0.45$)，疼痛 ($r = 0.58$) との関連性が，PDQ-39 値は GDS ($r = 0.56$)，健康調査表の日常生活 ($r = 0.47$)，身体の動き ($r = .56$)，歩行 ($r = 0.53$)，便秘 ($r = 0.58$) との関連性を認めた。

以上のことから，本疾患に対する鍼灸治療は，運動症状の改善を図ると共に，QOL の向上には便秘や運動機能である歩行や身体の動きについて，精神状態への改善には疼痛や自律神経症状である便秘や不眠の軽減に配慮して治療することが必要であると考えられた。